第 76 回　松江に暮らす庶民の記録「大保恵日記」紹介

松江市の指定文化財に「大保恵日記（おぼえにっき）」という江戸時代に書かれた日記があります。この日記を書いたのは、末次京店に店舗を構える大店・新屋（あたらしや）（瀧川家）の分家だった和多見新屋に勤めていた太助という人物です。

日記には、今を生きる人間の精一杯の苦悩や不安、喜び、感謝、希望、驚き、怒りなどがありのままに記してあり、太助の日々の息遣いが感じられます。さらに、太助は松江や周辺地域での数々の事件や出来事を、あたかも記録者のような観察眼と情報によって記載していました。読み進めるごとに江戸時代末期の松江にタイムスリップしてしまう日記です。

きわめて個人的な記録ですから、小筆で丁寧に書かれた部分があったり、崩し字が全く独自の筆法であったりする箇所、太助独特の記号や省略字も多くあります。分厚く綴じられた冊子体の 4 冊の簿冊ですが、比較的保存状況は良いものでした。それでも虫に浸食された部分が多いために、たやすく読むことはできません。しかし、発見されてから間もなく、設立目前の松江歴史館の貴重な史料として、かつ、松江市史編纂の重要な参考文献として内容把握が求められる史料でしたので、多数の解読者の協力でほぼ完読し、史料として読むことは出来るようになりました。

その成果が松江歴史館で展示に利用され、江戸時代の松江に住む庶民太助として紹介されています。それは、『〈松江市ふるさと文庫 9〉松江城下に生きる-新屋太助の日記を読み解く-』（松原祥子著）としてまとめられました。そして、『松江市史』編纂では江戸時代の記述に必須な重要史料として、また、他の分野の参考史料としても活用されています。しかし、これらは研究者や一部の者が知っていて利用するだけのものでしたので、一般には知られることはありませんでした。

この日記は文政 9 年（1812）から書き始められ、最後の日は嘉永 7 年（1853）12 月大晦日のことです。この日は「寒く、風雪ちらちら」降る日でした。太助はこの日も自分の私的な仕事であった書写業に励んでいます。勤め先である和多見新屋へは、時々呼び出されて用事を頼まれたり、自分でも顔を出したりする程度で、息子の門兵衛（初名は政次郎）が常勤で勤めていました。この時、太助は 73 才になっていましたが、前日の 29 日には天気が良かったので自宅の前通りの障子を張り、戸口の障子も張り替え、さらに行燈の張替えもしています。大晦日のこの日は、白潟社の代宮（よこや）家で一日中、年始祭り・歳越星祭り・初穂日付留な

ど頼まれた帳面の整理をしています。嘉永７年は 11 月に安政と元号が変わりましたから、正式には安政元年（1854）12 月のことです。太助も末文に「南無阿弥陀仏為御恩報謝なむあみた仏嘉永改テ安政元寅十二月大晦日」と書いています。

【写真 1】「大保恵日記」４冊（松江市指定文化財）、松江歴史館蔵

　この年は大震災のあった年でした。安政南海大地震が 11 月５日に発生したのです。

※嘉永７年・安政元年（1854 年）11 月４日に東海・東山・南海諸道で大地震「安政東海地震」（震源：北緯 34.0°・東経 137.8°、M8.4）。被害は関東から近畿に及び、特に沼津から伊勢湾にかけての沿岸がひどかった。津波が房総から土佐までの沿岸を襲った。

※同月５日、畿内・東海・東山・北陸・山陰・山陽道で大地震「安政南海地震」（震源：北緯 33.0°・東経 135.0°、M8.4）。東海地震の 32 時間後に発生。被害地域は中部から九州に及ぶ。大津波発生。

【写真２】「大保恵日記」嘉永７年 11 月５日部分

太助は前日の「安政東海地震」は感じなかったようですが、11 月５日の「安政南海地震」を体感しました。松江には雪が降り、風雪で寒い日でした。太助は日記に「大地震夕七ツ過頃、前代未聞大震にて家内に居る事相成らず」、このために息子門兵衛に背負われて和多見新屋へ行きます。午後４時過ぎごろでした。主人夫妻も出てきて、心おきなく養生するようにといたわられ、ほっとするまもなく、この日は夜明けまでに 7，８回も余震が続く恐怖の日となりました。それからの日記には、この地震の模様が松江市中や周辺地域の状況に加え他国からの情報も書き込まれています。

日記はこの年で終わっています。太助が亡くなるのはこの５年後の安政６年（1859）２月のことです。なぜこの年で終わっているのか、残念なことです。太助の筆力、文章力ではまだ、書き続けられたと思うのです。あるいは書いていたのが今に伝えられなかったのではないかなどと思ってしまいます。

文政９年（1826）太助が 49 歳から書き始めたこの日記は、時にはとびとびの月日もありますが、安政元年（1854）まで、ほぼ 29 年間の松江の記録といえます。

この日記を一般の人たちにも読んでもらいたいと、現在、文政９年～嘉永２年までの部分を活字本として出版しました。つづいて嘉永７年（安政元年）までの部分も公開する計画です。この貴重な庶民の日記は、研究文献として、また小説・エッセイの題材としても活用できるユニークな史料ではないかと思います。下記に日記の内容を列記してみます。

【日記内容】

太助の記述する内容を大まかな項目で分けると、下記のような事象を知ることができます。

- 天候（天気・自然現象・地震など）
- 家族（妻きよ・息子安蔵と政次郎・西代村親戚・末次茶町三好屋など）
- 人々（末次白潟の商人・郡村商人・村落役人・町、村、浦の女・近所の女性・武家の女と女中・子ども達・遊女、芸子・友人・知人・近所仲間・鉢屋など）
- 衣食住（家事・家屋・衣服・燃料・食物・食べ物種類など）
- 生活（書写・病気・付き合い・共同作業・物価・質・職業・旅・自営・出納帳・哥・賭け事・もめ事・賃銭など）
- 精神（仏事・法要・信仰・祈祷・夢・占い・看経・心境など）
- 娯楽（相撲・芝居・見世物・囲碁・将棋・浄瑠璃など）
- 新屋（白潟和多見新屋主人家・末次京店本家主人家・斎藤家など親戚）
- 仕事（用談・交渉・折衝・志儀・損得・責任など）

- 藩関係（藩政-御触・人事・処罰-藩主・稲生田など家中藩士）
- 世相（事件・事故-火事・殺人・欠落・家出・傷害・盗み・水難・海難・喧嘩-不正行為・刑死・敵討・流行病・天災・人狐・他国の風評など）
- 祭礼・行事・年中行事・一生行事（左吉兆・御松囃子・初午・大餅さん・天神祭・庚申・金比羅祭・清正祭・花火・正月・年始礼・盆準備・盆・盆礼・節句・節分・出産・御七夜・祝言など）

そして、動物・魚介・植物・作物などについても折々記しています。中でも出色なのは「評」とか「評二曰（いわく）」と特記して、あたかもかわら版のような記述で書いている世相です。江戸時代の松江及び周辺の社会面の新聞を読んでいるような記載です。

天候についても、「天気吉」「曇天」「雨天」と簡単に記載するだけでなく「天気よし、朝少々曇り、又よし」など一日の天気変化の様子を詳しく記述している日が多くあります。記載のない日もあるのですが、約 29 年間にわたる、松江地域の幕末期の気象データとしてユニークな史料です。

第四冊目に記されている大地震の模様は、江戸時代、松江庶民の大災害時の行動と経過を記して貴重な史料と云えますし、また、同じく四冊目には藩政を揺るがした嘉永６年（1853）の９代藩主斎貴の致仕、10 代定安襲付時の動きも、太助が御家中の家屋敷に日頃出入りしている立場であったから知り得たのであろう正確な記述が記録されています。その情報収集力には驚かされ、かつ、当時庶民は藩政の事件を遠隔的に知り得ていたのだと知ることが出来ます。そして

- この時代の身分意識と人間関係
- この当時の松江の経済活動と物価
- 松江を中心とする当時の通信・交通事情
- 松江における様々な行事に対する人々の意識
- 当時の人々の衣食住の様子

等々、この日記は江戸時代末期の松江、また、周辺庶民の日常を活写して非常に興味深い史料なのです。

（史料編纂課／内田文恵／2018 年８月 22 日記）